

各 位

武雄・杵島地区農業指導連絡協議会
杵島農業振興センター

「稲作情報（第5号）」について（送付）

このことについて、下記のとおり「稲作情報（第5号）」を送付しますので、業務の参考にしてください。

1. 気象概況

月	半旬	平均気温			最高気温			最低気温			降水量			日照時間		
		平年 (°C)	R6 (°C)	平年差 (°C)	平年 (°C)	R6 (°C)	平年差 (°C)	平年 (°C)	R6 (°C)	平年差 (°C)	平年 (mm)	R6 (mm)	平年比 (%)	平年 (hr)	R6 (hr)	平年比 (%)
5月	1	17.6	18.6	1.0	23.8	24.1	0.3	12.0	13.3	1.3	27.2	1.5	5.5	30.9	30.9	100.0
	2	18.3	17.7	-0.6	24.5	23.1	-1.4	12.8	12.2	-0.6	29.3	9.5	32.4	30.5	27.2	89.2
	3	18.8	19.2	0.4	25.0	24.8	-0.2	13.3	13.0	-0.3	29.9	44.0	147.2	30.5	36.9	121.0
	4	19.5	20.1	0.6	25.7	27.9	2.2	14.0	12.5	-1.5	25.1	0.0	0	30.7	57.1	186.0
	5	20.2	22.1	1.9	26.5	28.3	1.8	14.7	17.2	2.5	19.6	0.0	0	30.6	28.7	93.8
	6	20.9			27.1			15.6			22.6			34.5		

○5月5半旬の平均気温は、平年に比べて1.9℃ほど高く推移した。また、降雨はなかったものの、日照時間は短く推移した。

2. 水稻情報田の生育状況（調査日：5月30日）

項目 品種	年 次	草 丈 cm	茎数 本/m ²	主 稈 出葉数 L	葉色 SPAD	概 要
コシヒカリ	本 年 値	55.0	641	10.3	42.9	・草丈は平年に比べて高く、茎数は多い。 (1株あたり茎数39本程度) ・主稈出葉数は、やや少ない。 ・葉色はやや濃い。 ・幼穂長 未確認~0.1mm程度
	前 年 値	53.3	713	11.1	47.6	
	平 年 値	52.7	625	10.9	42.4	
	平年比(差)	104	103	-0.6	+0.5	

※ 平年値は、H26~R5年度の平均値、耕種概要は稲作情報N01参照

(管内の生育状況)

○現在の生育ステージは穂首分化期~幼穂形成始期直前を迎えている。

3. 今後の管理

(1) 水管理

- ・「コシヒカリ」は、まもなく幼穂形成始期となる。
幼穂形成期から出穂期にかけては要水量が増加する時期であるが、湛水を長く行くと根を傷める場合があるので、引き続き間断灌水を行う。
中干しを実施していない圃場は、幼穂形成期までに軽めの中干しを実施する。
- ・現在、土壌が柔らかい圃場では、土壌をある程度固めることが最優先である。
中干し後も土壌が柔らかい圃場では間断灌水時に落水期間を長くとりながら、土壌を固めていく。
土壌の硬さは「歩いて足跡が付くが抵抗なく歩ける程度」が理想である。

- ・台風通過時は、水稻の生育ステージによって異なるが、本田移植後（活着期以降）は強風による水稻の茎葉の水分収奪や損傷を防止するため、深水管理を行う。併せて、台風通過後は、新しい水と入れ替え、こまめな間断灌水や浅水管理を行って根の機能回復に努める。

(2) 肥培管理

- 情報田の生育状況から判断すると、現在、出穂前30日頃と推定される。
- 穂肥施用の目安は、幼穂長 15mmの時（出穂前18日頃）に SPAD 値が 36.0～39.5 程度（群落葉色が 3.3～3.7） まで低下したら、ゴールド有機 50 を 10kg/10a 施用する。
- 必ず穂肥診断を行い、幼穂長と葉色の状況を確認し下記の穂肥診断基準を参考にする。
- ただし、いもちの病斑が上位3葉以内にある圃場では、穂肥で窒素濃度が高まり降雨が続くと、「いもち病」の好適発生条件となるため、穂肥施用量を減ずる。

表1 コシヒカリの出穂前日数と幼穂長の関係

出穂前日数	26	23	20	18	15	12
幼穂形成始期からの日数	0日	0～3日	3～6日	6～8日	8～11日	11～14日
幼穂長 (mm)	1mm	1～3mm	8～12mm	15～20mm	25～30mm	30mm以上
草丈 (cm)	～72cm	～75cm	～78cm	～80cm	～83cm	～
穂肥の施用時期				←→		

例) 幼穂長 15～20mm の時（出穂前 18 日頃）が穂肥施用時期であるため、穂肥診断した時の 幼穂長が 1mm の場合、その 5 日後に穂肥を施用する。

【穂肥診断の方法】

- ① 幼穂形成始期頃の草丈を測る。
 - ② 葉色（群落・SPAD 値）を測る。
 - ③ 上記①②の測定値を下の穂肥を診断基準に当てはめ、施用量を確認する。
 - ④ 施用量が確認できたら、記載された施用時期に穂肥を施用できるよう準備する。
- ※穂肥施用できるのは、葉色が「笹の葉色以下（3.5以下）」になってからである。

表2 穂肥診断基準

	葉色	葉色板		SPAD (値)	幼穂長 (mm)	草丈 (cm)	施用量 <ゴールド有機 50>
		群落	単葉				
穂肥施用時	淡い	3.0以下	3.5以下	34.0以下	2	75まで	15Kg/10a
		3.0～3.3	3.5～3.8	34.0～36.0	5	78まで	
	標準	3.3～3.7	3.8～4.2	36.0～39.5	15	80まで	10Kg/10a
	濃い	3.7以上	4.2以上	39.5以上	—	80以上	施用しない!

例) 穂肥施用時期の 葉色 (SPAD) が 36.0～39.5、草丈が 80cm 以下であれば、ゴールド有機 50 を 10kg/10a 施用する。

※七タコシヒカリは 佐賀県特別栽培農産物表示制度に応じた栽培方法を行っていますので、農薬及び化学肥料のカウント数を超えないように留意する。

(3) 病虫害防除

①葉いもち病

- ・補植用の『置き苗』は、葉いもち病の発生源になるため、すぐに除去する。

②斑点米カメムシ

- ・斑点米カメムシによる被害を軽減するために畦畔雑草の除草を水稻の出穂 15 日前までに終わらせる。

令和6年産 作物作付期間気象図
アメダス観測値(白石)

